

「東京新聞」に、小倉孝保氏の『踊る菩薩 ストリッパー・一条さゆりとその時代』の書評が載っていた。興味を惹かれ、読んでみた。ストリッパーとして、一世を風靡した一条さゆりの波乱に満ちた生涯の評伝である。著者・小倉氏は、毎日新聞社の論説委員で、世界中を駆け回り、多くのノンフィクションを著している。彼は、一条氏が亡くなって、四半世紀も経ってから、資料を集め、多くの人にインタビューをして、350頁の単行本の本書を書き上げている。大変な入れ込みようを持って、書いたことが分かる。

ストリップは、戦後から始まった性風俗で、徐々に、庶民たちから支持され、娯楽の王様になっていった。最盛期には全国に四百ものストリップ小屋ができ、四千人もものダンサーがいた。プロ野球選手は千人に届かない。落語ブームの今でも、落語家は東西合わせて千人ほどである。ストリップは、野球や落語の四倍もの員数を誇っていた訳である。そして、歌謡界の美空ひばり、映画俳優の石原裕次郎、プロ野球の長嶋茂雄が人気を集めていたように、一条氏はストリップ界でもはやされたという。私は、一条氏に関しては、「公然わいせつ罪」で裁判をしていると、新聞・テレビで聞いた記憶があるくらいである。

一条氏は下町の貧しい家庭で生まれ、小さい時から苦勞が多く、教育も十分には受けられなかった。キャバレーで働くようになり、ストリッパーになった。美味しいものを食べたい一心で、踊った。頑張り屋で、ダンスの練習に黙々と励み、頭角を現すようになった。そして、陰部を見せる「特出し」で、人気を集め、彼女の出演する小屋は入場料が高かったが、客は列をなして殺到した。看板スターとして、脚光を浴びた。観客は、菩薩を拝むように、手を合わせて見入った。しかし、「特出し」は「公然わいせつ罪」に該当し、しばしば、検挙され、罰金刑を受けている。引退興行として、最後のダンスで、「特出し」を演じ、逮捕される。彼女は刑務所に入りたくない、裁判で闘う。裁判は「芸術か、わいせつか」で、社会的な大きなうねりを見せる。著名な弁護士、学者たちが弁護し、「反権力の象徴」と見なされ、学生運動に燃えた若者、ウーマン・リブの運動家たちも加わり、裁判は過熱した。彼女は優しい人で、出会った人は皆、その人柄に引き込まれている。彼女は「なんでうちみたいな裸踊りにこんな大勢の人が付いてくれるのかな」と言っている。「特出し」にも他意はなく、客の求めに応じ、喜ばせたいサービスと考えていたので、「反権力」などは頭がない。ただ、他のダンサーも「特出し」はやっているし、自分だけが弱い者いじめをされていると反発はしている。裁判は敗訴し、懲役刑が下される。

刑務所で静かに過ごし、出所後は、落ち着いて暮らしたいと思っていたが、スナックを開き、彼女の名を聞いて、大繁盛する。そのスナックもサービス旺盛で、閉店に追い込まれる。年金で生活する真面目な男性と出会い、結婚し、落ち着いた主婦業に入ったものの、平穏な生活に満たされず、歓楽街で飲み歩く。離婚し、愛人を作る。痴話喧嘩をして、車に飛び込んだり、体中をやけどする大けがもする。男と酒に振り回され、生活は乱れていく。働いて、自活したいと頑張るが、それもできなくなり、生活保護を受け、釜ヶ崎の小さな部屋で一人暮らしとなる。スポットライトを浴びたことから、男に遊ばれ、男を遊び、酒浸りになり、底辺の生活に落ち込んだ。そして、近くの病院で息を引き取る。彼女の死を知って、多くの人が弔いに来て、お寺で葬式をする。その死は、芸人の最期に相応しいと評価された。彼女が死んで、17回忌のイベントが開かれたが、参加者が多く、二回に分けても、超満員だった。彼女の踊りに魅せられ、その優しさを忘れられない人が、こんなにいたと報告し、『踊る菩薩』は終わっている。一人の女性の生と死は圧巻である。